

博士学位請求論文審査報告書

論文提出者氏名 安藤 洋平
学位の種類 博士（文学）
学位論文題目 E・M・フォースターのフィクション研究
—関係性の中の「個人」たち—

1. 論文内容の特色と要旨

（特色）

安藤洋平氏の学位請求論文（本文 165 ページ＋参考文献一覧 10 ページ）は、20 世紀イギリス前半のモダニズムの時代に小説家として活躍した E・M・フォースター(1879-1970)の短編小説と主要な長編小説のテキストを用いて、登場人物たちがそれぞれ「個人」として、いかにジェンダーや階級など当時の社会の規範的価値観に抵抗して自己確立を果たそうとしているか、あるいは多くの場合がそうであるように、自己確立を果たせずに挫折に終わるかを独自の視点から丹念に分析して、その結果としてフォースター作品における「個人的人間関係」がどのようなものであるかを明らかにすることでフォースター文学の特質を解明しようとするものである。本論文の特色は内外の先行研究にも広範に参照しつつ、ジェンダー、セクシュアリティ、クィアなど新しい批評理論を用いて、フォースター作品の中では十分に研究されているとは言えない数多くの短編小説を丁寧に分析して新しい解釈を提示していること、そしてフォースターの代表的長編小説についても、ジェンダー、セクシュアリティ、階級、人種、帝国主義など様々の視点から独自の解釈を提示していることであり、本論文は今後の日本におけるフォースター研究に貢献できるものとして高く評価される。以下本論文の構成と各章の内容を概観してみたい。

（本論文の構成と内容の要旨）

本論文は二部構成から成り、第一部は 6 章から成る短編小説論であり、第二部は 4 章から成る長編小説論であり、以下のような章構成になっている。

序論

第一部 短編小説研究

第 1 章 「アンセル」(“Ansell”)におけるエピファニーと男性性

第 2 章 「あるパニックの話」(“The Story of a Panic”)の語りにおける男性性への姿勢

第 3 章 「エンペドクレス館」(“Albergo Empedocle”)の同性愛の読解を可能にする根拠

を採る

- 第4章 「機械が止まる」("The Machine Stops")における男性性回復の試みとジェンダー規範の切り崩し
- 第5章 「要点」("The Point of It")の要点は何か?
- 第6章 「分裂した自己—「あのと時の船」("The Other Boat")における死の意味—
- 第二部 長編小説研究
- 第7章 最初期の「イタリアもの」に見る人間関係の構図
- 第8章 曖昧なジェンダーによる「結びつけ」—『ハワーズ・エンド』(*Howards End*)における「家の力」—
- 第9章 『モーリス』(*Maurice*)における「書かれたことば」の重要性
- 第10章 「本物のインド」を見ることはできるのか—『インドへの道』(*A Passage to India*)における異文化「理解」—

結論

第一部に先立つ<序論>では、イギリスの知的中産階級出身のフォースターが「個人的人間関係」を重視した作家であること、その関係性の考察には異性愛、特に同性愛といったジェンダー、セクシュアリティに関わる視点が欠かせないことを指摘した上で、これまでのフォースター批評・研究史を手際よく概説する。フォースター研究に欠かせないライオネル・トリリング(Lionel Trilling)やウィルフレッド・ストーン(Wilfred Stone)などの比較的初期の著名な批評家にも言及しつつ、最近のジェンダー、セクシュアリティ批評を紹介し、その有効性を述べた上で、植民地と帝国主義を扱うポストコロニアル批評にも言及している。また日本における最近のフォースター研究も概説していて、先行研究への目配りもよくなされている論文である。

次に第一部では第一章から第6章まで上記のようなフォースターの短編小説を主としてジェンダーの視点から論じている。以下各章の内容を概観する。

第1章<「アンセル」におけるエピファニーと男性性>では、フォースターの伝記的側面の強い短編「アンセル」における書物(知的精神性の象徴)の川への落下という「エピファニー」体験を通して主人公のジェンダー観の変容を論じている。

第2章<「あるパニックの話」の語りにおける男性性への姿勢>では、一貫性を欠く語り手としての中産階級的規範を守ろうとする主人公の男性性にうかがわれる語りの曖昧性に着目して、結果的にこの小説は規範的男性性批判を回避していると鋭く論じている。

第3章<「エンペドクレス館」の同性愛の読解を可能にする根拠を探る>では、この物語が主人公と友人男性との同性愛を描いたものと解されることが多いが、主人公ハロルドには妻もいて、実に多義的な解釈を許容する側面があり、「同性愛の物語」というより「クィアな物語」として解釈できるという。

第4章<「機械が止まる」における男性性回復の試みとジェンダー規範の切り崩し>で

は、フォースター作品の中では唯一デストピア小説、空想科学小説として読まれる「機械が止まる」を扱っていて、主人公クーノ(Kuno)が機械に支配される以前の人間性・男性性を取り戻そうとする試みを、現実世界におけるジェンダー規範の切り崩しの試みとして論じている。

第5章<「要点」の要点とは何か?>では、一人の男の現世と来世を描く難解な短編「要点」におけるサブプロットを炙り出すことで、<要点>とは結婚によって友人男性との同性愛的欲望を抑えて死んだ主人公ミッキー(Mickey)を通して「性」に正面から向き合うことの重要性を示すことであると論じている。

第6章<分裂した自己—「あのと時の船」における死の意味—>では、社会的自己と個人的自己の分裂に苦しむ中産階級出身のイギリス人男性ライオネル(Lionel)と有色人種の男性との同性愛行為の果ての自死を、ジェンダーの視点からある種の「救済」と捉えて肯定的に論じている。

次に第二部「長編小説研究」では、第7章から第10章まで、「イタリアもの」と称されるいくつかの長短編、代表作の長編『ハワーズ・エンド』、作者の死後出版の問題作『モーリス』、最後に長編大作『インドへの道』が論じられている。以下その内容を概観してみよう。

第7章<最初期の「イタリアもの」に見る人間関係の構図>では、イタリアを舞台とする初期の長編『天使が踏むのを恐れるところ』(*Where Angels Fear to Tread*)と『眺めのいい部屋』(*A Room with a View*)を中心に、同じくイタリアを舞台とする幾つかの短編を「イタリアもの」として扱い、これらの小説では慣習や規範に捉えられた中産階級のイギリス人男女の主人公たちと野性的な現地イタリア人との男同士の関係、あるいは男女の関係の中で、結局規範的価値観を越えられない関係性や性の曖昧さを指摘している。またイタリアものに見られる「土地の霊」や「神話的世界」への作者の関心などの指摘も興味深い。

第8章<曖昧なジェンダーによる「結びつけ」—『ハワーズ・エンド』における家のカー—>では、イギリスの知的中産階級のシュレーゲル(Schlegel)家と植民地貿易で財を成したが教養に欠けるウイルコックス(Wilcox)家、さらには皮肉な形で両家を「結びつけ」ることになる下層中産階級のバスト(Bast)家という関係性は、女性性対男性性といった単純なジェンダー・イデオロギーでは解釈できないことを指摘し、この小説の主人公ともいえるハワーズ・エンド邸の「中性性」が中心軸となっているという興味ある解釈を提示する。

第9章<『モーリス』における「書かれたことばの重要性」>では、この小説執筆当時では認められていなかった男同士の同性愛を正面から扱い、作者自身が生前は出版を認めず、作者の死後ようやく出版された問題作『モーリス』を扱っている。主人公モーリスがケンブリッジの学友とのプラトニックな関係から猟番の青年との同性愛に至るプロセスを描いていることから、論点として「肉体的性」に重きが置かれがちであるが、実際にはプラトン、聖書、カーペンター思想、伝記、そして手紙など「書かれたことば」が重要であることを興味深く論じている。

第10章<「本物のインド」を見ることはできるのか—『インドへの道』における異文化「理解」—>では、大英帝国の植民地として本国イギリスと深い関わりを持つ20世紀初頭のインドを舞台にイギリス人とインド人がどこまで理解し合えるのか、様々な人物、異なる宗教、インド悠久の自然などを介してイギリス人が「本物のインド」を体験できるのかをテーマとしている。この論文は異なる文化の垣根を越えてつながることの困難を描いた小説という従来の批評に準拠しながらもジェンダー、脱構築、ポストコロニアリズムなどの批評理論によって新しい読みの可能性も提示してくれる。

<結論>で、フォースターのフィクションは、前述したように常に新しい視点で読み解かれてきたが、同時に新たな視点からの読みを歓迎するものだと述べられていて、本論文もその好例であろう。

2. 審査結果の要旨

本論文は第一部でフォースターの批評・研究史の中で比較的扱われることの少なかった数多くの短編小説を各作品ごとにテキストを精読して、主としてジェンダー・セクシュアリティの視点から見事に分析し、それぞれの章が優れた作品論にもなっている。日本のフォースター研究だけでなく英米の研究においても、このように各短編作品を同じ視点でそれぞれ丹念に個別に論じたものはあまり例がない。この点は高く評価される。

本論第二部では「イタリアもの」と称される長編や、問題作『モーリス』を独自の視点から論じて新しい読みを提示している。また『ハワーズ・エンド』や『インドへの道』など従来から比較的良好に論じられる長編大作についても、ジェンダー、階級、人種、帝国主義などの新しい視点からテキストを精読して、それらの「関係性」に着目し、独自の解釈・新しい読みの可能性を示してくれている。この点でも今後の日本のフォースター研究に間違いなく貢献できるものである。

3. 今後の課題

本論文は前述したようにジェンダー、セクシュアリティ、クィアなど最近のフォースター研究の新しい流れを示し、新しい読みの可能性を提示するものではあるが、優れた文学作品はまた別の視点からの読みにも開かれている。その意味で今後はさらに研究の幅を広げて、別の観点からのフォースター研究も必要となろう。今一つは口述試験の時にも指摘されたことであるが、フォースター自身が最も愛着を持った自伝的要素の強い長編『いと長き旅路』(*The Longest Journey*)を正面から取り上げて論ずる必要があるだろう。

4. 口述試験と審査結果

口述試験は平成29年1月31日午後2時から5時まで、イギリス小説研究の専門家でフォースターにも精通する玉井暉学外審査委員を含む4名の審査委員により、本論文の内容を1章ずつ検討しながら、表記ミス、疑問点など長時間にわたり質疑応答がなされた。特

に専門家の玉井委員からの的確な指摘や鋭い質問にも安藤氏からは的確な応答がなされた。
(審査結果)

安藤氏は既に平成 25 年 5 月に博士候補者試験(外国語)にも合格していて、口述試験における的確な応答、本論文の内容に対して専門家玉井審査委員を含めた 4 人の審査委員の一致した高い評価から判断して、本論文が本学の学位規則第 3 条 2 項に定められた博士(文学)の学位に適格であると判断し、本学位請求論文を合格と判定した。

平成 29 年 2 月 6 日

審査委員

主査 愛知学院大学客員教授 鈴木 俊次

副査 愛知学院大学 教授 安藤 充

副査 愛知学院大学 教授 田中 泰賢

副査(学外審査委員)

武庫川女子大学教授(元大阪大学文学部教授)

玉井 暲